

ISSN 2186 – 3989

外国学会発表報告

「第六回中・日・韓・朝言語文化比較研究国際シンポジウム」

The Sixth Symposium on Comparative Study of Language and
Culture among China, Japan, South Korea and North Korea

2019年8月21日(水)～23日(金) 中国・延辺大学 (YanBian University, China)

経済経営学部 李 鋼哲

北 陸 大 学 紀 要
第48号(2020年3月)抜刷

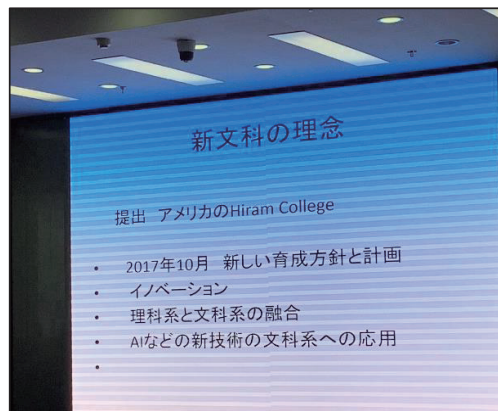
外国学会発表報告

「第六回中・日・韓・朝言語文化比較研究国際シンポジウム」
The Sixth Symposium on Comparative Study of Language and
Culture among China, Japan, South Korea and North Korea
中国・延辺大学 (YanBian University, China)

2019 年 8 月 21 日 (水) ~23 日 (金)

経済経営学部 李 鋼哲

発表題目：「米中貿易摩擦および東アジア経済への影響」



本シンポジウムの主催者は中国東北部吉林省にある延辺大学の外国語学院日本語学科および日本学研究所であり、2009年に第1回同シンポジウムを開催し始めて以来、隔年開催することになり、本年で第6回目を迎えている。

主催者の紹介によれば、開催地である延辺朝鮮族自治州は、地政学的に北朝鮮、ロシアと国境を接している国境都市で、地理的・文化的・経済的に中・日・韓・朝・ロ4カ国を結ぶ重要な交流の拠点となっている。少数民族の朝鮮族人口が自治州全人口の約4割を占める中国におけるコリアンタウンでもある。本シンポジウムが延辺大学を会場とし続けてきたのは、この地域における日本学研究を中心とする人文社会系学術研究の更なる活性化のみならず、平和を目指した東アジア地域交流の一層の発展を期するのが主な目的であるとしている。

2018年、中日両国の首脳会談が久々に実現し、両国関係も回復の兆しを見せており、朝鮮半島においても3回の南北首脳会談と歴史的な米朝首脳会談により、民族和解と平和醸成に向けた基盤づくりが、少しずつではあるが着実に歩み出していることが追い風となるだろう。そのことを踏まえて、今大会もまた、東アジア諸国の研究者たちが一堂に会して率直な議論を進めることで、国家・民族・政治の様々な障壁を乗り越え、平和な未来に向けた真の協力と友好関係を築くよききっかけ

を作る場として、日本と韓国、そして中国国内の日本語教育などに従事する学者や専門家が 100 名程度参加し、2泊3日で熱い議論と深い交流が行われた。

本シンポジウムの統一テーマは、「アジア共同体を視野に入れた日本学研究与展望(言語、文化、文学、教育、社会、経済、法律等)」となっており、以下の通り 6 つの分野に分けられて分科会を設けていた。

- (1) 日本学研究中心とした中・日・韓・朝人文系の比較・対照研究や一般研究
- (2) 東アジアにおける日本学研究的現状と展望
- (3) 多言語の共存と言語教育
- (4) 異文化の対話と価値観の多様性
- (5) 中国少数民族地域における日本語教育
- (6) 偽満州国(旧満州国)をめぐる日本研究

本シンポジウムの主催者のほか、共催者として韓国日本語日文学会、朝鮮族研究会(日本)などが参加し、また後援団体としては日本国際交流基金、北京日本文化センターなどが名乗りをしている。本シンポジウムの使用言語はすべて日本語になっている。

初日の 21 日の午前中は、開会式に続いて 3 つの基調講演が行われた。

基調講演 1 は、「中韓近代文学交流の歴史的な転換と価値重視」を題に延辺大学元学長の金炳珉氏により行われた。

基調講演 2 は、「中国日本語学科教育の転換——一般教育と研究への影響」を題に天津外国語大学前学長の修剛氏により行われた。

基調講演 3 は、「日本語の異分野連携研究の可能性——往來物資料を一例に一」という題で日本弘前大学副学長の郡千寿子氏により行われた。

同日午後には、10 カ所の分科会に分け、80 本の学術研究報告が行われた。分科会としては日本語教育分野と文学分野がそれぞれ二つの分科会、言語分野が 3 分科会、言語・文化分野分科会、文化・歴史分野分科会、社会・経済分野分科会などが設けられた。

翌日午前中は特別講演として 4 つの国内外学者による学術報告が行われ、昼には閉会式を行った。23 日は、フィールド・ワークのプログラムがあり、参加者の希望により中朝ロ 3 国の国境地帯視察と観光地の長白山の観光が行われ、会議の日程は終わった。

筆者が参加したのは、初日午後の第 10 分科会【社会・経済】分科会で、司会者兼発表者になっていた。筆者の発表テーマは「米中貿易摩擦および東アジア経済への影響」で、発表要旨は下記の通りである。

「2018 年 3 月以降、米国は中国に対して、貿易不均衡を理由に関税を引き上げ、それに対抗する中国も関税引き上げ措置を取った。世界的な両大国の貿易摩擦は、1990 年代から経済的に急成長を続けて世界第 2 の経済大国となった中国と、20 世紀初頭から約 100 年に渡って世界の覇権を握ってきた世界唯一の超大国である米国との覇権争いとして表れている。この貿易摩擦は、貿易アンバランスを切り口にしながら、知的財産権や技術競争や為替・金融まで拡大し、両国の全面的な経済摩擦へと発展する様相を見せている。その背景には、中国の国際貿易における「市場経済国」地位の問題(WTO 加盟後約束事項を十分に履行せず)、中国の大国外交の展開と世界秩序への挑戦、それに対抗する覇権国米国の地盤沈下への焦りなどにより覇権争いの様相を呈している。この貿易摩擦は、中国経済の持続的な成長に大きな打撃を与えることだけではなく、日本や東アジア諸国の経済に対して大きな影響を与えることが確実である」。

発表の流れは以下の通りである。

はじめに

- I. 米中貿易摩擦に対する私の基本的な見解
 - II. 米中両国のパワー・バランスの変転
 - III. 中国の大国戦略と世界秩序への挑戦
 - IV. 貿易摩擦の表層要因
 - V. 貿易摩擦の深層要因
 - VI. 中国の経済現状と今後の行方
 - VII. 東アジア経済に与える影響
- 終わりに：今後の展望

本シンポジウムの主役は東アジア諸国の日本語教育の従事者達である。地域開発分野を専攻とする筆者が本シンポジウムに参加したきっかけは、共催者である朝鮮族研究学会（日本）の会長を10年前に歴任したことがあり、共催者の代表として参加するようになったことであつた。幸いに経済分野も参加できるように配慮してくださったので、何度も参加してきた。ちなみに、筆者は故郷でもあるこの延辺地域と北朝鮮、ロシアとの国境デルター地域における国際開発問題をテーマにして長年研究してきたため、毎年フィールド・ワークとして同地域を訪れていることもあって、本シンポジウムには5回目に参加することになった。

参加者の研究分野はそれぞれ異なるが、日本語を共通言語とするところがユニークであり、ほとんど言語障碍がなく、国内外の学者や専門家たちとの交流ができたことが有意義で面白かつた。本来ならば、題目にもあるように朝鮮（北朝鮮）の学者たちも参加することを想定していたはずだが、様々な要因で実際には参加できていないことは残念であつた。

最後に、この度私に国際学会での発表を支援してくださった本学関係者の皆様に、この場を借りて心から感謝の意を表すとともに、本学会の参加で得られた知見を今後の研究と教育に活かして行くことをここにお約束したい。